

特 253

381

能狂言兒童劇第一篇

飴太女地藏

一場



佐々木緑亭作

始



3
9

特253
381

清水三重三畫伯挿畫竝ニ裝幀

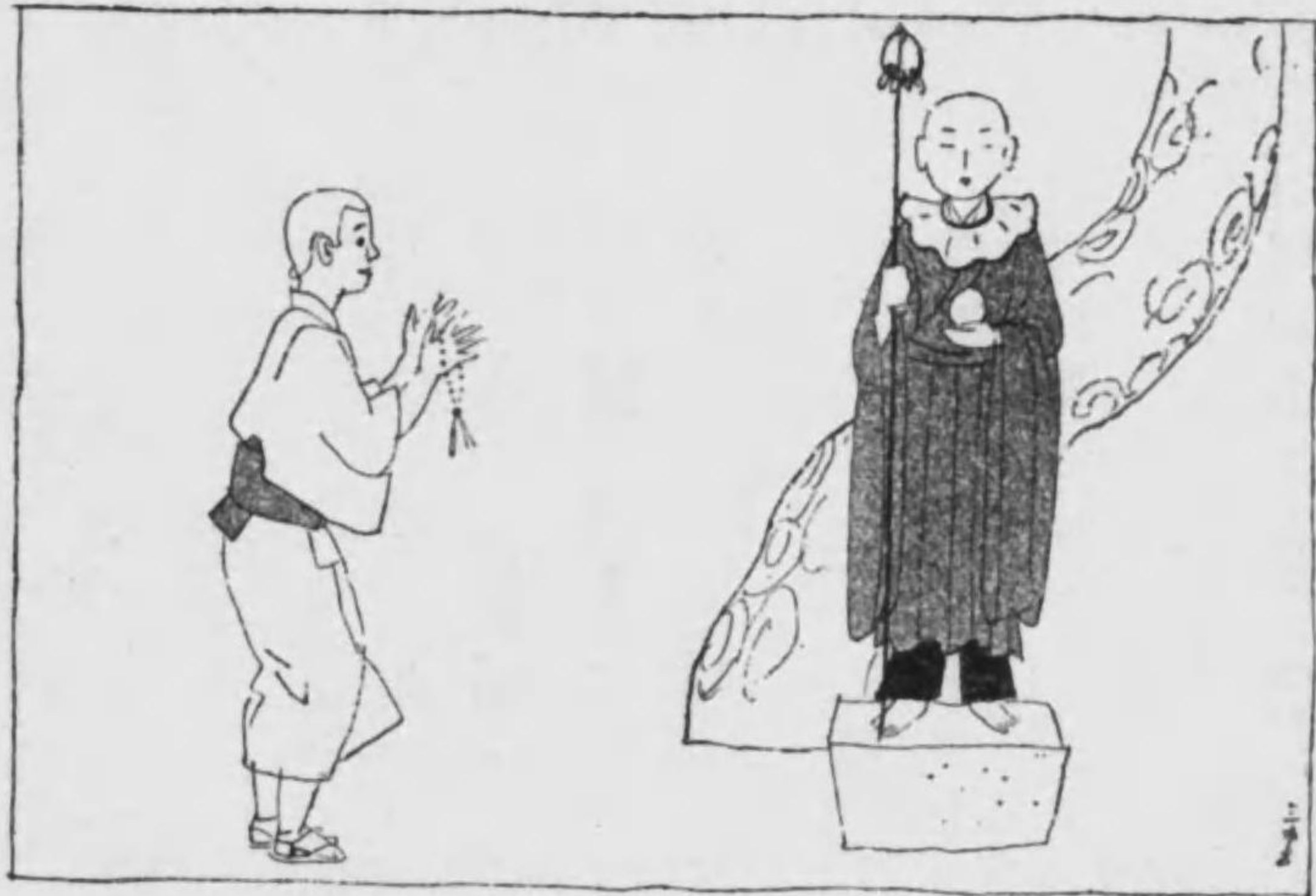
はしがき

狂言の起原は詳ではありませんが喜劇の一形式として室町時代に能の間劇として行はれ後歌舞伎狂言の稱が起つてからこれと區別する爲に「能狂言」と云はれるに至りました。

概ね世間日常の可笑的な事件を脚色したもので諧謔を旨とし諷刺的で平民的であつた爲に、大いに大衆に歡迎せられその發達もいちじるしいものでした。しかし凡てが榮枯盛衰の道を辿らねばならぬ様に「能狂言」もその後ある一部に公開せらるゝのみで今日に及びました。然るに近時歐米の文化陶酔より歐米物質精神の弊を脱し、國體再認識、國粹發揚の氣運隆興し、此「能狂言」次第に普及し且つ狂言特有の明朗性が現代人の心弦に融合し歡迎せらるゝに至りました。

私は私の最も愛する兒童にこの明朗な「狂言」をお贈りすべく筆を執りました。が、何分にも古風なこの「狂言」には云ひ現はせない典雅な味が難解な古語と交叉し兒童には稍もすれば折角の興味を削ぐ懼が多くありますので、なるべく「狂言」の味を損はないやう學校劇に適するやう明朗且つ教育的に





能狂言兒童劇 第一編

節なめ地藏

一場

佐々木 綠亭作

舞臺
 時 春麗かなる日
 所 村はづれ
 背景には田畑に介在して田舎
 家が見えるものを描く。右手
 に能舞臺風の松の木をポール
 紙にて作り置く。傍に地藏様
 を置く。
 註 地藏様の誕かけは大きく、
 臺も大きく作つておくこと。

改作しました。幸ひに父兄、先生方の適當なる御盡力により私は私の最も愛する兒童がこの日本精神の洋溢して居る「能狂言」の演出される日を楽しみに致します。
 終りに、私のこの企に對して御賛同下された盛林堂主林甲子太郎氏に厚く感謝の意を表する次第であります。

昭和十年十一月 明治節の日に

著者識

登場人物

僧

狂言師

杖長

村人多數

小學生一、二、三、四、五

其他唱歌隊多數

◇開幕◇

(僧) 破れた袈裟に珠數を持ち零落したいでたち——下手出入口より靜かに能
がかりにて登場——足は擦るやうな歩き方、手は軽く前に下げ——舞臺中央
で一寸止まり「右向け」の動作の如くに観客の方に向く——

註) 今後の登場人物はいづれもこれと同じ動作で登場する。

僧

罷り出でたる者は、怠け者の坊主で御座る。あまり怠けるによ
つてどこの寺でも置いてはくれず、あの寺に二日この寺に三日
と諸所の寺々を廻り歩く誠に怠け坊主で御座る。さて昨日より
歩きつづきて疲れは出る！ お腹は空く！ 足が棒のやうにな
つて了うた——間——(一寸上手を見て) オ、幸ひあの大木の下には休
み場も御座るやうなれば、あれにて一休み致そうと存ずる。

(上手に向ひ更に下手へ歩みそして松の木の下へ——舞臺を一廻りする事にな
る——歩いて來たと言ふ心組で)

ヤレやつとな。(腰かける)

——間——

(狂言師) 辨慶稿の着物、狂言師らしい袴を着すれば尙よく、零落したと云ふ
いでたちで——僧と同じ様に靜かに舞臺中央——観客の方に向き

狂言師 現れ出でたる者は、下手な狂言師で御座る。藝が下手、友達との交際が悪い！によつてどこの小屋でも使つては呉れず、さりとはく弱つたもので御座る。何かよき思案はなきもので御座るかなア。

(腕組をして考へる)

——間——

(矢張り松の木を見付けて)

オ、あの木の下でゆつくり考へると致そう。

(僧と同じやうに上手に向ひ舞臺を一廻りして松の木の下心)

ヤレやつとな。

(僧の隣り下手へ腰かける)

僧 (二寸目禮して) どなたかは存ぜぬが、大分お疲れと見えるな。

狂言師 (返禮して) 御親切な御言葉忝ない。御見かけの如くこの先の町より一日歩き通しにて、イヤハヤ弱つて御座る。

僧 左様で御座るか。實は拙僧も諸所を歩き廻り今日は未だ食事にもせず空腹と(腹を凹こませる身振り)疲れとでこれ以上歩くことも出来ず如何致そうかと考へて居る處で御座るが……處で貴殿も何か御考へ込みのやうだが……。

狂言師 (天儀そうに首を上げ) 御覽の如く拙者狂言師では御座るが、その狂言が下手によつてどこの小屋でも二、三日でお拂ひ箱……それ故アチラ、コチラと歩き廻り(萎れて下を向く)

僧 それはく、サゾ御困りて御座るな。處で拙僧も同じやうな身の上(二寸考へ込むやう腕組して)拙僧は怠けるが好ぢやによつてどこの寺でも相手にしては呉れず……。

(狂言師、僧顔を見合はせ)

——間——

狂言師 それはさて！ 何かよき工夫はなきものか。
僧 全くよき工夫はなきものか。

(兩人腕を組んで考へ込む……間……僧一傍の石の地藏を見附けてハタト手を打ち)

僧 これ狂言師どの、よき智慧が出て御座るぞ。
狂言師 (ほつとした面で) それは如何な事。

僧 (石の地藏を指差し) これこの地藏様ぢや、そなたは幸ひ狂言師ぢやによつてこの地藏様の涎かけをなし、拙僧の袈裟を着して俄地藏となられい。拙僧はこの珠数をサラ／＼やり、得意の辯舌で嘘八百を村の人等に吹聴すれば、正直な村人を瞞すことなど朝

飯前と言ふもの、何んと如何で御座る、さすればソレ賽銭の雨お供物の山が今から目の前にチラつくではないか？

狂言師 これは又一段とよき御考へ……さすがは高僧の御智慧は吾々愚物とは異ふわい！ 異ふわい。

僧 (やゝ得意になつて) ハツハツハそれ程でも御座らぬて。

狂言師 では早速その狂言へと取りかゝり申さう？

僧 左様、左様、御用意召され。

(兩人石の地藏を下し涎かけ、袈裟等の扮装よろしく、この兩人の動作は空腹と疲れとを見せてなるべく面白く、おかしく)

狂言師 (臺の上に入り) エヘン。

僧 (手を打つて) 上手々々さすがは狂言師……本物の地藏様のやうに見えるは見えるはアツハハ、ハハ、ハハ——そなたは人間より地藏向

きて御座るな。

狂言師 イヤハヤ石の地藏によく似るとは心細し……(頭を掻く)

僧 これく地藏様が頭を掻いたり動いたりしてはなりませんぞ、

狂言師 いかさまく。

僧 近寄つて觸られては折角の苦心も水の泡！ 何かよい考へ……(一

寸考へて―獨言のやうに―) そうぢやくくこゝに輪を書き、尊き地藏様ぢやによつてこれより内へ這入つてはならん……近寄ると罰が當ると申せばよいわい。(と言ひつゝ地藏の廻りに輪を書く眞似をする) サテ、これから皆の衆を集めるのが一仕事ぢやテ……。

(舞臺中央観客の方を向いて獨唱)

石の地藏さん

頭が圓い

頭も圓けれや

心も圓い

丸く丸々

大きくなつて

南無有難や

この地藏

皆んな一心

願かけ召され

靈驗あらたな

お地藏様は

何んの願ひも

一心こめれや

御慈悲賜はる

聞き召さる

さアさ皆さま

願かけ召され

一度二度より

三度が四度よ

さア賽銭

ばらく上げて

拜みなされよ

一心に

(僧の獨唱が終り少し間を置いて小學生四五人舞臺裏から次の唱歌を歌ひ下手より登場—舞臺一列になり観客に向く—この時丁度唱歌の終るやうにする—)

◎山雀 (文部省唱歌第四學年)

くるくる廻る

目が廻る

とんばう返り

宙返り

川瀬にかゝる水車

びいびい山雀

びい山雀

よいこら引いた

綱引いた

もいちど引いた

綱引いた

釣瓶の水をこぼすまい

びいびい山雀

びい山雀

(唱歌は適當なものと變へてよい、但し一列に並ぶ時に終るやうにする)

小學生一

僕等はこの村の小學生です。怠けずに一生懸命に勉強しますから成績もよく、いつも先生に褒められて居ります。

小學生二

今學校からの歸り路ですが、山村さんの小父さんたちが村はずれのお地藏さまが尊いお坊さんの御祈りて急に大きくなり、願ひ事なら何んでも望み通り叶へて下さると言ふ事を聞いたもの

ですから、これから御參詣に行かうと思ひます。

小學生三

そして智慧を授けて戴くやう御祈りして來ようと思ひます。

小學生四

さあ皆んな行かう。

小學生五

(靜かに上手に向つて歩み更に下手——中央位まで來た時、狂言師、僧、腰を下して休んで居たが)

僧

(立上つて狂言師に向ひ)これく、誰か來たやうで御座るぞ。

(狂言師急いで臺へ上つて地藏の恰好をする)

(僧は手に珠數をサラくやりながらナムアマミダークやつて居る)

小學生一

なる程大きな地藏さんになつたものだなア。

小學生二

大人の人と同じ位の大きさをだネエ。

小學生三

不思議だなア？急に大きくなるなんてネ。

小學生四

あそこに居る坊さんが偉いからだロー。

小學生五 坊さんに會つてよく聞いて見よう。

一 同 それがいゝゝ。つかゝ近寄る。

僧 (驚いて) これゝゝこの勿體ない尊いお地藏様に近寄つてはなりませぬぞ——それそこに筋が引いてある、その筋から内へは這入つてはなりませぬぞ。

(小學生一同後へ退く)

小學生一 お坊さん一寸御伺ひ致しますが、今迄小さいお地藏様が急にどうしてこんなになつたの？

僧 それは拙僧が有難いお經を澤山あげたによつて靈驗を御示しになり大きくなつたので御座る。

小學生二 靈驗とはどういふもの？

僧 (一寸詰つて) そうだな……その有難いお經をあげたによつてお地藏

様も嬉しくなつて……でナア、又詰つて今度皆んなの色々の願ひ事や望み事を叶へてやる……と言ふのがソレ靈驗ぢや。
小學生三 僕はモット學校の成績が良なるやうに御願ひしたらキットよくなる？

僧 それは勿論。

小學生四 僕は體操が下手だから御祈りしたら上手になる？

僧 勿論。

小學生五 僕は唱歌が一番嫌いなんだが、好きになれるかなア。

僧 それは好きになれる——だが皆んな只で御詣りしたのでは功德が薄い。御賽錢をあげるなり、又は供物を上げるなりしなければ駄目で御座るぞ。その御賽錢も一錢より三錢の方が早く功德が戴けるし、御供物も粟や麥よりおいしい果物か御菓子の方が

よいわけぢや。早く御家へ歸りお父さんやお母さんに御話して御供物を澤山あげるやうなされや……。

(手で早くくと追ふやに……小學生一同不審相に顔を見合せて或ひは首を傾けながら静かに後退)

狂言師 ヤレく疲れるわいく何しろ昨日からの歩きづめの上、今度

は又動いちやならぬとは……仲々地藏の役も樂なものでは御座らぬテ……それにしても早く御供物が上らぬものかなア。

僧

拙僧とて空腹の上には喋るによつて口が強張つてフラくして来たわい……間……又誰れか參詣のやうぢや(狂言師に向つて)それ急いで用意く。

(狂言師臺へ上がる)

(村人及び唱歌隊齊唱、次の唄をうたふ)

今度此の度

わし等の村に

大きな地藏さま

お立ちやそうな

迎も靈驗

あらたにお在し

何でも願掛け

聞くさうな

俄地藏さま

南無有難や

噂擴がる

村から村へ

我も我もと

御願ひごとを

心にこめて

大饅頭

(頃につれて村長をはじめとして村人多敷登場)

村長 (能がりでわしはこの村の頭で御座る。このたび村はずれの地藏様が徳の高いお坊さまの御祈りによつて御身丈も大きくなり功德を授け下さると聞く程に、これより村人と共に参詣致そうと存ずる……(村人に向つて揃つたればそろそろ参ると致そう。)

村人 畏まりました。

(村人の一人大きな饅頭を盆の上に三ツ四ツ乗せて居る)

(村人等舞臺一廻半ば頃から、僧ナムアマミダリくやる)

村長 (地藏を見上げて) これはく誠に珍しき事で御座る——のう皆の衆

村人 左様で御座る。(村人一齊に地藏を見上げる)

僧 (急に大聲で) 南無阿彌陀佛々々(靜かに目を開いて) これはく皆さん御揃での御参詣忝なう御座る。このお地藏様も拙僧のお經の力で尊きお地藏様となられたによつて近寄つてはなりませんぞ。それその筋より中へ這入ることはなりませんぞ。

村長 (思はず後退り) これは御上人様で御座つたか。私はこの村の頭で御座る。このたび御上人様の有難き御經のお力でこのお地藏様が御尊體も大きく靈驗も灼にならせられた由承はり、村人一同大喜び……何はさて御参詣致さねばと存じ少々ながら御供物として饅頭を持参致し一同打揃つて参りました。(饅頭を差出し) 先づあ

僧 げさせられい、供へさせられい。

僧 (饅頭を見てグット唾を呑む) これは……うまそうで御座るな。(又唾を呑む)
では早速お地藏様に供へるといたそう。

(地藏の前に置く、地藏これを見て矢張りグット唾を呑む)

僧 南無阿彌陀々々々尊きお地藏様へ申し上げます。南無阿彌陀々々このたび村人一同打揃つての参詣にこの饅頭を御供へ下されたー
(ヤ、小聲で) だが急ぐまいぞ。村人の歸るまで……急ぐまいぞ。

(村人これ聞いて互に顔を見合す)

僧 (村人に向つて) 地藏様も非常に御喜びのやうぢや……だがこの上とも御賽錢、御供物を忘れまいぞ……必ず有難い功德を授けられるによつて。

(村人僧を圍んで半身以上観客の方に向く)

村 長 有難いこと……實はこの村も二年つゞいての不作の爲め一同

難儀して居ますのぢや、何卒お地藏様の功德を以つて今年は豊作にしていたゞきたいもので御座るが!

僧 いと易き願ひお祈りして進ぜよう。

(地藏一寸饅頭に手を出す村人一人これを見る、地藏慌てゝ手を引込める)

村 人 一 上人様、私の一人の忤奴が十日程前から病に取付かれて苦しんで居りますれば一日も早く快るやうお願ひ申して下されや!

僧 いと易きこと御祈禱して早く快して進ぜましやう。

村 人 二 上人様、私の處の飼馬が四五日前、何者かの爲めに盗まれ色々探して居りますが、今に分りませんので困つて居りますのぢや。

僧 何卒御力を以つてその馬の在處を知らせて頂きたいもので……
(饅頭に氣を取られて) いと易きこと御祈禱して早く快して進ぜましや

うく。

村人二 (意外の返事に驚き大聲で) イヤ馬の在處を伺つていたゞきたいので…
僧 (ハットして) よいく伺つて進ぜやう——左様なことは直ちに御告
がある程に！ すぐ分り申す……時にこの對話の内に地藏急いで餛だ
け一寸なめる。このお地藏様は有難い尊いお地藏様で如何なる病氣
も治らぬものとしてなく、火難、水難、盗難は除き、村は豊作、
繁昌すること請合ひ誠に以つて、實に以つて靈驗灼なるお地藏
様で御座れば皆の衆も一心に御信心なされや、(村人一同揃つて額づく
又お供物で御座る。これは非常に大時な事にて一日に三回以上
御供へなされぬと御腹立ちになることがある。それぢやによつ
て御供物だけは一日に三回！ (右拳を大きく力強く振る) これは必ず
く御忘れ召さるな。

(この間地藏すつかり餛をなめて了ふ)

村長 (餛頭を見て) オヤ餛頭の餛がないぞ……これは不思議、これは妙だ。
これは不思議……(一寸地藏の口許を見て) アレ！ 地藏様の口許に餛が
ついて居るぞ！ (近づいて一寸觸はる—地藏一寸櫛つたがる……この間の動作
を面白く繰返す) ヤアー皆の衆！ 地藏様とは眞赤な詐り、これは
普通の人間で御座るぞ。

(僧驚き腰を抜かす—村人大勢地藏を取り圍み地藏の袈裟を剝ぐ—狂言師村人
の間から抜け逃げる)

村長 サテハ正直な吾々をよくも瞞したな……憎いやつ！ それ皆の
衆逃がすなく。

(僧、狂言師、村人、よろしくからみ合つてから)

僧、狂言師 許させられい。

村人大勢

やるまいぞく。

(逃げる)

(追ふ)

これを繰り返しつゝ——僧・狂言師は疲れと空腹に尻餅をつきながら逃げる動作面白く——村人は——村長を先きに互に腰紐をつかんで一列となり、同じ足調子、同じ動作を繰り返しつゝ追ふ——よろしき處で——僧、下手揚幕へ入らんとし、つゞく狂言師、村人よろしく——

——賑やかに緩つくり幕——

館なめ地藏 (終)



能狂言兒童劇・種目

- 一、船なめ地蔵 (四・五年程度)
- 二、鼠の嫁入り (三・四年程度)
- 三、箱根の關所 (五・六年程度)
- 四、つんぼと盲 (五・六年程度)
- 五、旅は道連れ (三・四年程度)
- 六、化け案山子 (三・四年程度)
- 七、四人轉太 (五・六年程度)
- 八、狐塚 (四・五年程度)
- 九、野原の醫者 (四・五年程度)
- 一〇、恩返し (三・四年程度)
- 一一、國境争ひ (五・六年程度)
- 一二、三人旅 (四・五年程度)

定價各金五拾錢
送料各金十四錢

僧の獨唱

佐々木綠亭 作詞
長谷基孝 作曲

ハ調子

1. イ シ ノ ナ ゾ ナ シン ア タ マ カ マ ル イ
 2. み ん な い つ し ん か ん か け め さ れ
 3. ナ ア ナ ミ ナ ナ マ ガ ン カ ケ メ サ レ

1. こ ん ど こ の た ひ わ し ら の ひ ら に
 2. ニ ワ カ ナ ゾ ナ マ ナ ム ア リ ガ タ ヤ

マ ル タ マ ル マ ル オ ホ キ タ ナ ツ タ
 れい け ん あ ら た な お ち ぞ う さ ま は
 イ ナ ド ニ ト ヨ リ ナ シン ト ガ ヨ ド ヨ
 お ほ き な ち ぞ う さ ま お た ち ち ぞ う な
 ウ ハ ナ ヒ ロ カ ル ム ラ カ ラ ム ラ ヘ

ナ ム ア リ カ タ ヤ オ ナ ツ ウ ナ マ ハ
 な ん の ー ね が ひ も い つ し ん こ め り
 ナ ア ナ ー ナ イ セ ン バ ラ バ ラ ア ゲ ナ
 と て も ー れ い け ん あ ら た に お は し
 ツ レ モ ー ツ レ モ ト オ ネ ガ ヒ ゴ ト ヲ

イ ナ ヤ ニ カ ハ ル ー タ イ ー ナ ツ ク
 お じ ー ひ た ま は る き き ー め さ る
 ナ ガ ー ミ ナ サ レ ヲ キ ー ー れ ン ニ
 な ー も か ナ ン か け ー ー ー さ う な
 コ コ ニ コ メ ナ ー オ ホ ー マ ン ナ

昭和十一年十二月十六日
昭和十一年十二月二十日發行



發行所 盛林堂書店

東京市日本橋區本町四丁目十一番地

電話 東京一八四六番
電報 日本橋〇二四一番

能狂言兒童劇 定價金五拾錢

著者 佐々木 綠亭

東京市日本橋區本町四丁目十一番地
新刊編輯 林 甲子太郎

東京市小石川區製粉町〇八番地
印刷者 齋藤 梅吉

東京市小石川區製粉町〇八番地
印刷所 三立舎印刷所

終



6
6

東京 盛林堂 發行

三
三